

出張ノ目的 本年五月ヨリ九月ニ至ル五ヶ月間佛國巴里ニ於テ開
催ノ巴里萬國博覽會ニハ日本館設置セラレ本邦代表的美術工藝
品ヲ陳列スルコト、ナリタルガ之ガ陳列方法ハ從來トハ全ク異
リタル配置ヲ必要トスルヲ以テ之ガ説明監督ノ為メニハ人ヲ派
遣スルノ要アリ 偶々萬國博覽會協會ヨリ人選方本校ニ依頼シ
來リタル為田邊教授ヲ派遣シ右事務ヲ處理セシメテ以テ七月
三十日ヨリ八月五日迄巴里ニ於テ開催ノ第八回國際美術教育會
議〔第八回素描及び応用美術國際會議〕ニ出席セシムルニアリ
出張期間 六月下旬ヨリ九月末日ニ至ル三ヶ月半
旅費ノ支途 萬國博覽會協會ヨリ支出ノ見込

〔昭和十職員関係書類填務〕
〔二年〕

とあり、和田と違つて具体的用務を帯びていたことが判る。なお、
田邊は追つて朝鮮総督府からも外国事情調査を囑託（無給）され
た。同年十月十四日に帰国している。

⑫ 大峽秀栄の起用

昭和十二年九月二十四日、大峽秀栄を講師（修身授業担当）を囑
託した。大峽は明治三十四年山形県に生まれ、米沢中学興讓館、第
二高等学校を経て同四十年東京帝国大学哲学科を卒業。土浦中学
校、宮崎中学校、新潟医学専門学校に勤務し、大正十年から同十二
年まで倫理学、教育学研究のためイギリス、ドイツ、アメリカへ国
費留学した。

履歷書には

自大正十年十月
至同十二年六月

二十ヶ月間於獨逸國ハイデルベルヒ大學リツケル
ト。ヴオバールミン、ヤスパース、マイヤー、ホフ

マン諸教授ニ就テ哲學、宗教哲學、心理學、倫理
學、教育學研究

自大正十年九月
至同十二年十月

英獨佛米五ヶ國ヲ旅行シ教育事情ヲ視察研究

と記されている。新潟医專退官後は明治専門学校、大正大学、大東
文化学院、成蹊高等学校等に勤務し、昭和十一年には文部省から臨
時教科書用図書調査を、翌十二年には同省思想局から日本文化講義
講師を囑託され、また、東京高等農林学校講師を囑託されている。

⑬ 日中戦争開始とその影響

昭和十二年七月七日、蘆溝橋における日中両軍の衝突を契機に日
中戦争が開始され、本校も例に漏れず戦時体制の影響を強く受ける
ようになった。まず、戦争勃発により、昭和十二年中に職員では齋
藤幸晴、大江雄五、鳩ヶ谷敏治、関野克、清水平吉らが召集を受
け、生徒では日本画科一名、油画科四名、彫刻科木彫部一名、研究
科一名が応召、それ以前から応召中の者四名を含めて十一名が休学
した。翌十三年に応召による休学者はその倍以上となり、その後も
新たに召集された者、召集解除により復学した者等もごももの状態
が続き、その間に戦死者や負傷者も出始めて、緊迫した空気に包ま
れて行った。

学校当局は応召による休学者に対してはその成績に応じて特別進
級、特別卒業などの措置をとり、職員の親睦団体である厚誼会から

費用を支出して戦地に居る生徒や内地の病院に収容されている生徒に慰問品を贈ったりした。

次に、日中両国間の関係が極度に悪化したために、中国人留學生たちは留学継続が困難となった。開戦の翌月の八月三日、文部省は所轄の諸学校に対して次の通牒を発した。

滿支兩國人學生々徒ノ取扱ニ關スル件

今般北支ニ於ケル事變ノ勃發ニ伴ヒ各學校ニ於テハ特ニ滿支兩國人學生生徒ノ取扱ニ關シ左記要項ニ依リ適宜ノ方策ヲ講シ其ノ保護監督上萬遺漏無キヲ期セラレ度此段依命及通牒

記

一、教職員ハ素ヨリ一般學生々徒ハ大國民タルノ襟度ヲ失ハス滿支特ニ支那人留學生ニ對シテハ徒ニ之ヲ刺戟スルカ如キ言動ヲ慎ムト共ニ彼等ヲシテ不安動搖ニ陥ラシムルコトナク、努メテ其ノ素志ヲ遂ケシムル様配慮スルコト

二、留學生トノ聯絡ハ一層之ヲ緊密ニシ常ニ其ノ動向ニ注意ヲ拂フコト

三、夏季休業ト雖モ滿支留學生ニ就イテハ歸國、在留ノ別、在留中ノ居所ヲ明ニシ又其ノ身上ニ關シテハ懇切周到ナル補導ヲナスコト

四、前項ニ關シ調査ノ上詳細八月十五日迄ニ報告スルコト、尙夏休業明ケノ就學狀況ハ之ヲ遲滞無ク報告スルコト

(「自昭和十年一月至昭和十八年四月 外國人學生ニ關スル書類教務」)

本件に關連して夏休み明けの九月二十一日に本校が文部省に提出した報告書によれば、滿州國留學生五名中一名が休み中歸國したまま登校せず、中華民國留學生九名中六名は休み中歸國したまま登校せず、一名が休み明けに歸國した。歸國者については同年十月十三日の文部省の通牒により「便宜休學等ノ取扱」がなされ、当分學籍留保の措置がとられた。同十三年五月末の本校の調査では中華民國留學生全員が休學、滿州國留學生全員が登校中という結果となっている。なお、蘆溝橋事件を挟んで留日中国人(中華民國と滿州帝國)學生總數五九五八名が一九〇六名へと激減した(『昭和十二年 中華民國殘留學生名簿』昭和十二年十二月、日華學會)。

十二年夏に歸國した本校の中華民國留學生朱坤、玉式廓、趙琦、俞成輝、閻振宇、胡光弼、沈柏年、沈壽澄、許統璋の九名は二十年三月三十一日付で除籍となった。

昭和十二年十二月十三日、日本軍は南京を占領。国内では戰勝祝の催しが盛んに行われた。本校も左記の要領で奉祝行進を行なった。

戰勝奉祝行進要項

一、期日 南京陷落ノ當日トス(但公報午後アリタルトキハ其翌日 尙當日雨天及日曜日ニ相當ルトキハ其翌日トス)

二、時刻 午後一時

三、集會場 本校々庭

四、參加者 職員生徒約六百名

五、監督者 配屬將校外職員約五十名

六、隊列ノ編成 全校生徒ヲ平素訓練ノ際ニ於ケル區分ニ從ヒ五

個中隊ニ編成シ中隊長及小隊長ニハ生徒ヲ以テ之ニ充テ各中隊間ノ距離ハ十米トシ其間ニ職員ヲ配置シテ監督セシメ校旗ヲ先頭ニ隊伍整然ト行進ス

七、遵守事項 行進中ハ取締官ノ指揮ニ從ヒ國旗以外ノ器物ヲ携帶セシメズ

八、通行経路 校庭ヨリ上野公園ヲ經テ上野廣小路ヲ通り神田旅籠町ヨリ右折シテ佐柄木町ニ出デ小川町ヲ左折シテ神田橋ヲ渡リ馬場先門ヨリ二重橋前廣場ニ至リ萬歳ヲ齊唱シテ解散ス

〔自昭和十二年庶務掛雜書類掛〕
〔至の十三年庶務掛雜書類掛〕

なお、東京音楽学校ではこの非常時局に際し国民精神総動員の趣旨を發揚すべく「聖戰讚歌」(作歌者乗杉嘉寿、選曲者東京音楽学校)を作成し、昭和十二年十二月十五日に本校を含む各方面に配布した。



昭和12年12月14日 南京陥落慶祝旗行列
中央芝田徹心校長 旗手 小森五郎
(小森五郎氏提供)

⑭ 日本画科生徒の意見

昭和十二年、日中戦争が勃発しようとしていた時期に、美術界は松田改組後の混乱の余波が続ぎ、その中で、「新しい藝術運動がほとんど起りうる餘地がないといった行きづまりが、この數年來の美術界の實情なのである。」(下店静市。同年一月二十日『大阪時事新報』)とか「横山大觀氏の東洋精神主義といふ言葉を近頃しばしば見聞する。」(藤田嗣治。同年二月五日『報知新聞』)などということが言われていたが、日本画の分野では行きづまり状況を打破するために幾つかの新しい組織が生まれた。同年二月二十八日に本校日本画科の事実上の主任教授結城素明が川崎小虎、青木大乗らと作った大日美術院もその一つである。ただし、その趣旨というのは、「従前の歪んだ日本主義を排して佛敎渡來以前の眞の日本主義によつて制作に當る」(同年三月一日『東京日日新聞』)という、大分注釈を要するもので、またその活動もそれほど新鮮味のあるものではなかった。

こうした状況のもとで日本画科生徒たちの煩悶は徐々にのつたが、前述の同科改革問題(175頁参照)も一向に進展を見ず、問題解決の見通しはつかなかった。左記の文は右の状況下における一生徒、校友会委員の猪飼俊一が書いたものである。猪飼は昭和十四年同科卒。第三回新文展に入選したものの、翌年一月に入營、十七年一月にフィリピンで戦死した。

所謂新日本畫より學校に於ける我々の仕事を思ふ

猪飼 俊一

近頃所謂日本畫の新傾向の展覽會が處々に開かれ、新日本畫